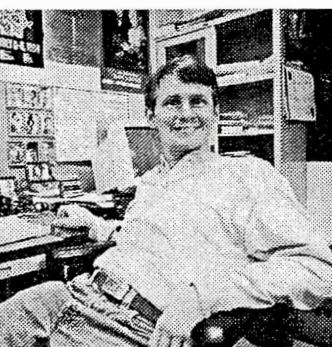
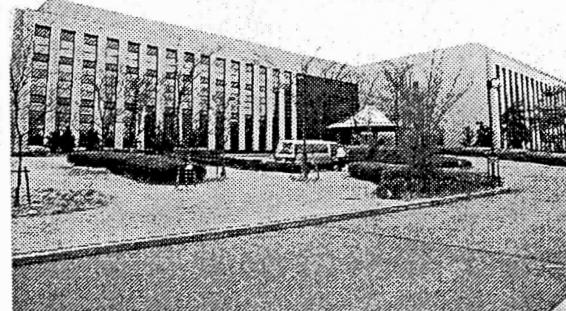


## Next

## ATR創立10周年

ATRは今や世界が注目する研究機関になった

生物学者のトマス・レイ氏  
は人工生命的大家でもある

ワーク(神経回路網)を研究していた。下原室長はさうに高性能なニューラルネットを実現しようと、研究が始まつばかりの人工生命に着目。四年前にATRにやってきたときは、人工生命的研究者を世界中から集め、四人が集まつた。自分でも驚いた。豊富な研究資金、雑務に追われない研究環境が外国人にも受けた。

「ATRは組織が小さく、風通しがよいから私が呼びたいと思えば機動的に呼び集められる」。統括する研究チームが成果を生み出すことがおもしろいという。

## 成功の力ギは人間にあり

三四日、ATRは創立十周年の記念式典を開いた。創設に深く関与した熊谷信昭・元大阪大学長は「ATR成功の最大の理由は、人。産官が実際に優秀な人材をATRに送つたことだ」とあいさつした。

三月末には、新たにエイ・ティ・アール環境適応通信研究所を設立し、災害時でも通信機能を維持するような通信システムの研究を開始した。どんな成果が生まれるか、楽しみだ。

(経済一部 鹿児島昌樹)

かわいい「ミック」を知っていますか――。ATR客員研究員の土佐尚子さんは、コンピューターグラフィックス(CG)などの作品を制作している映像作家。見る人に反応する自立した作品を作ると研究を開始。話し掛ける人の声の抑揚に応じて、喜びや、怒りなどの感情を示す男の子のCGキャラクター、ミックを完成させた。

ミックはだれかが話し掛けると機嫌がよければ「こんちちは」と答え、悪ければ「バイバイ」とそっけない対応をする。「ミックのようなキャラクターを登場人物にして、視聴者と相互にやりとりができるような新しいタイプの映画を作りたい」と夢

を語る。土佐さんらの成果は、コンピューターが人間に對等に働きかけるコミュニケーションの基礎技術につながるだけなく、全く新しい芸術分野を創造する可能性がある。

「ATRを代表する部門の一つ」として日裏社長が挙げるのと同様、能処理研究室の室長だった岸野文郎主幹研究員は臨場感通信会議システムの開発責任者。このシステムは単に音声と画像

## 官民から参加 外国人も多数

は、そして研究の企画・遂行に関する広い裁量を持つATRの室長職が日本の研究機関で一番、とらやましがられる。

「ATRを代表する部門の一つ」として日裏社長が挙げるのと同様、能処理研究室の室長だった岸野文郎主幹研究員は臨場感通信会議システムの開発責任者。このシステムは単に音声と画像

を伝達するテレビ会議ではなく、バーチャルリアリティー技

命の大本は映画「インディ・ジ

創立十周年を迎えた。人工生命や、臨場感通信、音声認識・自動翻訳など、独創的な成果を生み出し、内外の専門家の間で評価は高い。成功の要因は、日本の研究機関の「殻」を破り、外国人を含め優秀でユニークな人材が集まつたこと。一体どのような研究者たちが研究に取り組んでいるのか、ATRの内側をのぞいてみた。

国際電気通信基礎技術研究所(ATR、京都府精華町、日裏泰弘社長)が、創立十周年を迎えた。人工生命や、臨場感通信、音声認識・自動翻訳など、独創的な成果を生み出し、内外の専門家の間で評価は高い。成功の要因は、日本の研究機関の「殻」を破り、外国人を含め優秀でユニークな人材が集まつたこと。一体どのような研究者たちが研究に取り組んでいるのか、ATRの内側をのぞいてみた。